

編 集 後 記

ちかごろ、組織の「体質」という言葉をしばしば見聞きする。機能破綻を引き起こす原因としてひきあいに出されることが多いようだ。診療の場でもときどき登場するこの体質とはひどく曖昧な概念で、「すべての精神的・身体的な人間の形質の総和で、遺伝と環境の相互作用によってつくられる（マイペディア百科事典）」ものだそうだ。いま、大学も、また我々の教育研究環境も、この「体質」改善のただ中にある。組織の体質に則って構成員が努力を重ねる程に、本来の目的や意義を見失ってしまう愚を犯さぬためには、何をなすべきか？

デカルトは『方法序説』で、学問の秘訣は「思考の方法」である、と主張する。ここで言う方法とは、直近の問題解決のための手法あるいは技術ではなく、学問的・日常的な生き方、生きる姿勢、ものの見方や考え方などといった、所謂「方法」である。我々研究者組織にとっての「体質」とは、この日々のあり方や態度としての方法の総体ではなからうか？では我々科学者は、どのようにこれを見つめ直したら良いのだろうか？

ユダヤ教には、『トーラー』という“今日一日をどう生きるか”という総ての生活のしかたの規範を教える律法があり、その創世記12章の一節に「出でよ、お前に向かって。お前の国から、お前の親族から、お前の父の家から…」と言う。この冒頭は、原語では「Lkh-Lkh（読むときは母音を補って Lekh-Lekha（レッフ・レハー）と読む）」という再帰的な調子でことさらに強調される。「自分に向かって出る」とはどういうことか？

元禄時代の萩生狙徠は、『太平策』のなかで「クルワ（郭）の外に出ないとクルワのことは解らない」と強調し、この方法的発見によって、古文辞学という独自の学問を確立してゆく。組織の中に埋没しては、自身のことは判らない。積極的に外に出て、改めて本来の意味を問い直してはじめて見えてくるものが本物だ。このような、「自らの視点を自己の外に置いて自己を客体化して、自分自身を時間と空間の広がりの中で相対化し、他者と同等の対象として冷静に見つめ直す」という他の動物にはない精神作用によってこそ、ヒトは文明を築き上げることが出来たのに違いない。

では、何故それが改めて強調されなければならないのか？それは、人間は現状のクルワの中で安住する当座の心地よさを好み、外へ出たがらない性質を持っているからだ。確かに組織への帰属なしには人間は生きて行けないし、興隆期にはそれ無しには組織の成長や安定は得られない。しかし、それではカタストロフィーへのかくれた歩みに気づくことは出来ない。体質を問い直すことは出来ないのだ。もし必要があるのであれば、苦しくても敢然とクルワの外に出て自らを見つめ直し、ブレイクスルーを目指さなければならない。クルワへの依存的帰属のみを自己の拠り所としていては、決してそれは出来ない。自己が確立して、はじめてそれは出来る。生理学者である我々はその拠り所として、二千余年の歴史を背負い人類最古の学問の一つである「生理学」というアイデンティティーをもっているのである。

(入来篤史)

編 集 委 員

岡田 泰伸	一般生理 [編集・広報幹事] [HP, VISION, LECTURES]	佐々木和彦	神経生理 (東北) [表紙]
赤須 崇	神経生理 (九州) [校正・編集後記]	定藤 規弘	心理生理 [HP]
入来 篤史	感覚、運動、高次中枢 [H-PSJ]	渋谷まさと	呼吸・循環 [JPME]
河西 春郎	神経・分泌生理 [校正・編集後記]	菅屋 潤壺	栄養・代謝・体温 (中部) [校正・編集後記]
川上 順子	感覚 [校正・編集後記]	関野 祐子	神経化学 [校正・編集後記]
北澤 茂	運動、認知 [校正・編集後記]	高井 章	平滑筋、自律神経 (北海道) [表紙]
久保 義弘	細胞分子生理 [A-Tea]	辻岡 克彦	循環 (中・四国) [校正・編集後記]
窪田 隆裕	腎・体液 (近畿) [Profile]	美津島 大	内分泌 (関東) [HP]
小泉 周	感覚 [HP]	村上 政隆	膜輸送 [HP]
小西 真人	筋 (東京) [校正・編集後記]	吉岡 利忠	体力 [校正・編集後記]
小山 なつ	感覚、神経生理 [HP]		